

上町台地のソーシャルインクルージョン

上町台地は本当に人にやさしいまちか

小辻昌平

1. はじめに

ソーシャルインクルージョン=社会的包摂という観念は社会的排除に対応する観念として用いられ、主に社会的援助や保護政策と同様なものと見なされることが多い。しかしながら制度的な援助や保護というもので社会的排除が解消されると考えるのはいささか不十分であると著者は思料する。社会的排除はそれ自体で大きな社会的な不安を引き起こす可能性がある。排除された者を放置することは、欧米ではアンダークラス問題やインナーシティ問題を深刻化させる重要なファクターであり、包摂的な処置によって社会へ再統合することが求められている。

排除へ向かう社会的な斥力が何であるかを考察することなく、単に援助や保護を用意してもそれが排除される当事者を包摂することになるのだろうか、また排除のメカニズムを考察することなく包摂の議論はないように思う。

上町台地が「まち」として包摂的であるか。問いを立てて、自ら検証していくことが今回の調査研究の目的である。

2. 社会的排除とは

社会的排除の定義について、岩田正美は著書の中でジェニー・パーシースミスの言葉として以下のように説明している。

「社会的排除は、現代社会で普通に行われている交換や実践、諸権利から排除される人々を生み出すような複合的で変動する諸要素に用いられている。貧困はもっとも明白な要素の一つであるが、社会的排除はまた、住宅、教育、健康そしてサービスへのアクセスの権利の不適切性をも意味する。それは個人や集団、とくに都市や地方で、場合によっては差別され、隔絶されやすい人々へ不利な影響を及ぼす。そしてそれは社会基盤の脆弱さと、二重構造社会をはじめから定着させてしまうようなリスクと強く関わっている。」

この定義のもとに岩田は、参加の欠如と、それが複合的な不利となり、帰属が曖昧化し、排除へと進むと説明している。たとえば貧困は排除への斥力の重

要な要素であるが、貧困のみが排除の原因ではなく、貧困のため社会の様々なアソシエーションへの参加の欠如を生み、不確かな帰属性と不利が複合化し、排除され、排除ゆえに貧困になるという連鎖を引き起こし、排除と貧困の入れ子状態を発生させるとしている。

3. 周縁部と排除 ～よき隣人、美しいまちの罫

都市の中には周縁部というものが作られる。これは意図的な場合もあるが、自然発生的に集積し周縁部化する場合もある。歴史的に見れば上町台地の中にはかつて周縁部であった場所が散見される。

たとえば現在の空堀地区はかつては「野獺」といわれた周縁部であり、高津神社、生玉神社の周りも周縁部であったし、四天王寺の周辺には巫女町といわれた周縁部があった。これは社会から引きはがされた人々や中途半端な接合の中で生きざる得ない人々が集まる場であった。

しかしながら都市の近代化に伴う形で周縁部が移動し、現在では上町台地に周縁部の役割はない。むしろ「良い場所」としてジェントリフィケーションが進み、「よき隣人」を求める傾向が強くなり、上町台地マイルド HOPE ゾーン協議会もある意味では「よき隣人」を高めることを目的としている部分も否定できない。我々は住みよいということの中に無意識のうちに排除機能を埋め込んでいるのではないかと思料する。たとえば不審者が入ってこないように集合住宅の玄関はオートロックに防犯カメラが標準装備である。共用便所の使用は限定的である場合が多い。寺の山門は夕方には閉じられ、ホームレスは公園に寝てほしくないと言われ、誰しも考える。できればネットカフェも出来てほしくないし、ワンルームマンションは誰が住んでいるかわからないので無用心である。まちが美しくなる反対側で隔離され排除される者は確実に存在する。つまりそこには強い排除の力が働いていることを考えなければならない。

4. 韓国での社会的包摂の事例

平成 25 年 9 月 22 日から 24 日に韓国を訪問し、韓国の社会的包摂に関して施設見学と意見交換を実施した。ホームレス支援と多文化共生の実施の現場を訪問することを目的として主に 4 つの施設を訪問した。

第 1 の訪問先はソウル市内でホームレス支援を行っているタシゾギ支援センターとソウル駅にあるアウトリーチの現場である。1997 年の IMF 危機以来、

ソウル市内には野宿生活者が増加し社会問題となっていた。その中、救急救護体制としてタシソギ支援センターが開設され、現在は支援センターを中心に相談保護センターや緊急シェルターなどがある。

支援センターでは自立にむけてのプログラムがあり、特徴的な独自のプログラムには人文教育や演劇活動などがある。またホームレス自らが起業して自転車リサイクル事業を開始。自活サッカーチーム希望FCなども有する。

訪問した中で特に印象的だったのはソウル駅の地下道に設置されている緊急シェルターだ。この時期にはホームレスの数が少ないため閉鎖していたが、地下道の中を区切りトイレと簡易なシャワールーム、床はオンドルを備えて最大で180人を収容できる。

第2に多文化共生について、安山市の安山多文化村特区と外国人住民センターを訪問した。安山市はソウルの中心部から地下鉄で一時間ほどの郊外にあり、大規模な工業団地を抱え多くの外国人労働者が工員として労働している。1990年代に韓国人の製造業忌避現象が起こり労働力不足を補うため外国人労働者が集り、その後、雇用許可制の導入や結婚移民の増加などがあり、ここを多文化特区として定め、2008年には外国人住民センターを建設、現在センターでは通訳サポート、多文化図書館、外貨送金センター、無料診察所などの機能を備えている。町には様々な国の国旗が記された看板があり独特のインターナショナルな雰囲気がある。

第3の施設は、ソウル市内のモンゴル学校で、世界で唯一モンゴル教育庁が認めた外国にあるモンゴル学校である。モンゴル人は家族の絆が強く、親が外国で労働する際には家族が帯同するため、子供もいっしょに韓国へ来ているが、教育という点での問題があり、はじめは子供達の面倒をみていたのが、やがてこの学校になった。現在はソウル圏外の通学が困難な生徒のための寄宿舎もある。小学1年生から中学3年生までで現在83名が通っている。今後は300人が通える学校にする計画がある。

最後に仁川市の旧市街を訪問した。チャイナタウンにある仁川近代博物館は私設の博物館で、館長の崔さんが個人で集めた多くの資料は開港から近代化への道程に関するものを偏りなく集められ、興味深いものが小さな博物館にぎっしり詰まっている。近代博物館で永年韓国にお住いの戸田郁子さんも来ていただき、戸田さんのご自宅も訪問させていただいた。戸田さんのご自宅は日本統治下に建てられた日本式の連棟住宅で旧仁川府庁の官舎だった。現在は戸田さ

んが借りてお住いで、玄関を入ると廊下があり縦に部屋が並ぶのは日式住宅の特徴で、廊下には写真家の夫が撮られた写真が飾られていた。多文化婚の戸田さんの経験を踏まえた実際の困難さを説明いただいた。

韓国は急速な経済状況の変化と厳しい競争社会の中、どうしても社会と接合しない人達や排除される人が生まれる傾向にあるためその対策として施策がとられていると思料される。

5. 上町台地の社会包摂的な施設

上町台地でもっとも包摂的なアプローチを志向している施設の一つは下寺町の應典院であろう。

檀家がなく葬式をしない寺として「気づき」「学び」「遊び」をコンセプトにして、いのちと出会う会、コモンズフェスタ、寺子屋トーク、コミュニティシネマなどの主催事業と、シアトリカル應典院として演劇活動を支援している。

矢野紙器(株)は北河堀町にあるダンボールメーカーであるが、創業以来、障がい者雇用を積極的に実施されている。また別組織としてネクストステージ大阪LLP を立ち上げ就労支援を実施し、ネットワーク型ニートマッチング事業や、様々な訓練や自助プログラムも実施し、自立支援を実施している。

住之江区西加賀屋で重度障がい者の生活介護をしている「デーセンターいるか」が従たる事業所として谷町6丁目にある「いるかアートセンターくら」は、民家の蔵を改装した施設。毎日自宅とデーセンターの往復だけでは楽しみが薄いという考えから、路地の奥にある蔵をわざわざ選んで遊びに行ける施設として運営されている。段差をなくすようにバリアフリー化やトイレの施設を改装しているが、それ以外は特別な施設ではないが重度障がい者であっても生活の変化を楽しめるようにと作られている。楽器の演奏や、リモコン戦車に筆をつけ絵をかいたりできる。

徳井町にある NPO 法人フォロが運営するフリースクールフォロは学校に行くことができない子供たちの学びの場、居場所として6歳から18歳まで30名が通うフリースクール、現在は3名の常勤スタッフとボランティア20名で運営している。もともとは不登校児の親の集まりから当事者活動としてスタートした。

6. もっとも開かれた包摂的機能としての商店街

前項で列挙した施設はどちらかとクリティカルミッションを主として、対象者に対する志向性が強く、まちとしての機能ではなく、むしろ問題解決の方向性は個人の参加を通じて社会的抱擁を目指していると考えられる。「應典院」と「いるか」は若干地域性を考慮しているが、対象者としてはクリティカルであると言える。

日常的に参与観察をしている中で、最も多くの人にまた年齢の層を固定化せずにかかっている包摂性を有するのは商店街ではないかという仮説を立てるに至った。

私自身、必ずしもその店で買い物をしているわけではないが通勤途上で複数の商店の人たちと挨拶を交わす。加えて観察をしていると商売とは関係なく店員と客が立ち話をしている場面をよく見る。商店街の店は飲食店以外は多くの場合扉というものがなく常に店は開け放たれており、店員は外に向けて注意を払い、それが実際に買う客でなくとも動行を見ている。小学生の帰宅時などに路上に立つ見守り隊を地域で組織していることは多いが、商店街はそれ自体が見守り隊の役割を果たしているといえる。

そこで筆者は商店街利用についての15項目のアンケートを作成し「ぶら空堀祭り」に実施した。残念ながら有効回答数が少なく統計的なデータを得るには至らなかった。

7. 結論

上町台地は良好な居住と文化歴史を重層的に有する。大阪市内でも有数の職住に適した場所であり、なおかつ社会的包摂性を有する場所、人にやさしいまちであると言える。その中で中心的な機能をオープンに有するのが空堀商店街ではないかという仮説を立てるに至った。残念ながら本年度の調査においては、数値的にこのことを裏付けるに足りるデータを得ることが時間的物理的にできなかった。これは今後の課題としてひき続き取り組みをしたいと考える。

しかしながら、商店街で交換されるものは、貨幣と商品サービスだけではなく、情報や人と人の触れ合いである部分があり、物語の再生産の場所でもある。無駄な時間を店頭で過ごす中で、店は顧客からの信頼を得ることができ、客はコミュニケーションを通じて自己の些細な参加のきっかけを得ているように感じる。新築されるマンションが玄関がオートロックで閉じられた排除空間であるのに対して、商店街がオープンに開かれた包摂空間であることのコントラスト

トの強弱が上町台地の魅力のひとつであることは否定できない。

今後、上町台地の目指すべき部分は「寛容さ」ではないかと思う。その中にソーシャルインクルージョンという観念を含んでいくことで、より多様な人間が集積し、多様で多才な文化を形成していく土壌が醸成されるものと思料する。

以上

参考文献

「社会的排除」 岩田正美 有斐閣

「アメリカ大都市の死と生」 ジェイン・ジェイコブス 鹿島出版

「孤独なボウリング - 米国コミュニティ崩壊と再生」 ロバートパットナム
柏書房

「グレートリセット」 リチャードフロリダ 早川書房

「葬式をしない寺 - 大阪・應典院の挑戦」 秋田光彦 新潮新書

「厚生経済」 福田徳三 講談社学術文庫

「不平等の再検討 - 潜在能力と自由」 アマルティアセン 岩波書店

「サバルタンは語るることができるか」 GC スピヴァグ

「居住福祉」 早川和男 岩波新書

平成 26 年 1 月 24 日

上町台地マイルドHOPEゾーン事業 まちづくり提案事業 事業報告書

1 事業者名

なにわ人形芝居フェスティバル運営委員会

共同事業者名（あれば記入してください）

2 事業のテーマ・タイトル

五月七日のパラパラ合戦地図 その1 試行錯誤編

※応募時につけたテーマ・タイトルを記入してください。

3 事業の時期と実施内容等

時 期	実 施 内 容 等
8月	調査
9月	台本作成開始
10月	台本作成第一稿完成
11月	最終台本完成、作曲依頼、ビジュアル出演者依頼
12月	撮影、編集、提出

※実施した事業を月ごとに記入してください。

4 事業の効果・今後の展望

効 果	大坂夏の陣の五月七日の天王寺口の戦いについて、若いタレント志望の女性と役者を使って講談調に演じられる紙芝居台本を作成しました。歌も3曲オリジナルで作曲。これにより天王寺口の戦いを、簡潔で、ビジュアル的で、どんなところでも楽しんでもらえるような発表が可能になりました。このパッケージを持っていれば、様々なまちづくり提案事業などとの連携も図ることが出来ると思っています。
今後の展望	次回は、このパッケージを活用し、他の大坂の陣PRイベントに使ってもらうこともできるように、実施事業を展開していきたいと思っています。また、有識者の方々にも機会を作り、観ていただき、改良点などの参考意見も聞きたいと思っています。まちづくり提案事業はもちろん、他のイベント等との連携を模索するためのリーフレット等を作り、宣伝・実施していきたいと思っています。

平成 26 年 2 月 4 日

上町台地マイルドHOPEゾーン事業 まちづくり提案事業 事業報告書

1 事業者名

空堀子どもまちづくりの会

共同事業者名（あれば記入してください）

2 事業のテーマ・タイトル

次世代を育むまちづくりワークショップ ～空堀副読本を用いて～

※応募時につけたテーマ・タイトルを記入してください。

3 事業の時期と実施内容等

時 期	実 施 内 容 等
8月	
9月	
10月	商店街イベント参加のため調整会議に出席
11月	商店街イベント参加のため調整会議に出席、地域へあいさつ、ワークショップ下見及び広報、第一回ワークショップ開催
12月	ワークショップ下見及び広報、第二回ワークショップ開催

※実施した事業を月ごとに記入してください。

4 事業の効果・今後の展望

効 果	今年度の事業では、子供にまちづくりに関心をもってもらうためのワークショップを2回開催した。第一回目は空堀の未来の商店街を子供たちにつくってもらい、第二回目は、昨年度作成した子ども向け空堀本を使いながらまちを歩き、すごろくを作成してもらった。自分たちのまちの商店街を子ども達の視点で考え作り上げてもらったり、カメラをもってまちの良いところや悪いところを探してもらうことで、通りすがりの人の興味関心を引き、まちづくりの関心を多くの人にもたらすことができたと言える。
今後の展望	今後も、空堀子どもまちづくりワークショップを実施し、子どもたちに空堀に興味関心をもってもらう機会を継続していきたいと考えている。また、子どもをきっかけに周囲の大人のまちに関する意識の変化を期待し、歴史ある空堀のまちの魅力を守り続けていきたいと考えている。そのためにも、昨年度使用した子ども向け空堀本を活用し、多くの子ども達の手に渡す機会を創出できればと考えている。

5 事業の総参加人数

.....25名 (内訳：地区内から参加.....25名・地区外から参加.....0名・不明.....名)
その他、年齢別など詳しく内訳がわかれば記入してください。 (例：30代から40代が6割程度、など) 幼稚園児 15人、小学生 10人

※「5 事業の総参加人数」は外部へは公表しません。

※「3 事業の時期と実施内容等」、「4 事業の効果・今後の展望」は、欄内に記入の上、これらを補足するようなパンフレット・チラシ・写真等があれば適宜添付してください。

平成 26 年 1 月 31 日

上町台地マイルドHOPEゾーン事業 まちづくり提案事業 事業報告書

1 事業者名

直木三十五記念館

共同事業者名（あれば記入してください）

2 事業のテーマ・タイトル

文学歴史のまち上町台地の魅力まるかじりガイドブックをつくろう

※応募時につけたテーマ・タイトルを記入してください。

3 事業の時期と実施内容等

時 期	実 施 内 容 等
8月	企画案の策定
9月	作成ワークショップ
10月	作成ワークショップ トークイベント
11月	作成ワークショップ まち歩きの実施 冊子編集
12月	報告会の実施 冊子作成

※実施した事業を月ごとに記入してください。

4 事業の効果・今後の展望

効 果	個人の暗黙知である町歩きのコツをナレッジ化することができた。 特に可視化できないものに対して、文書化することで明確化ができた。 今まで我々がどんなまち歩きをしているかを振り返ることができた。 なお報告会は YOUTUBE に動画をアップする予定。
今後の 展 望	まち歩きの新たな担い手を養成するためのツールができた。 上町台地の魅力を再発見することでまちに対する愛着が変化するものと 考えられる。 今後冊子、動画の二次使用による効果があるものと思料する

5 事業の総参加人数

70名 (内訳：地区内から参加 4名・地区外から参加 16名・不明 50名)
その他、年齢別など詳しく内訳がわかれば記入してください。 (例：30代から40代が6割程度、など)
20代 2割
30代 2割
40代以上 6割

※「5 事業の総参加人数」は外部へは公表しません。

※「3 事業の時期と実施内容等」、「4 事業の効果・今後の展望」は、欄内に記入の上、これらを補足するようなパンフレット・チラシ・写真等があれば適宜添付してください。

平成 26 年 1 月 31 日

上町台地マイルドHOPEゾーン事業 まちづくり提案事業 事業報告書

1 事業者名

應典院寺町倶楽部

共同事業者名（あれば記入してください）

大阪城南女子短期大学 パドマ幼稚園

2 事業のテーマ・タイトル

多世代を結ぶ〈表現の学び者〉デザイン・プロジェクト～異界との遭遇～

※応募時につけたテーマ・タイトルを記入してください。

3 事業の時期と実施内容等

時 期	実 施 内 容 等
8月	「キッズ・ミート・アーツ」のプログラムの実施・commonsフェスタ企画委員会開催
9月	「キッズ・ミート・アーツ」の振り返りと、12月「寺子屋トーク」「commonsフェスタ」の企画と広報打ち合わせ
10月	「寺子屋トーク」「commonsフェスタ」企画内容に関する企画委員会開催
11月	「寺子屋トーク」「commonsフェスタ」等の広報と周知
12月	「寺子屋トーク」の開催・「commonsフェスタ（前編）」多世代交流の場「自分感謝祭」の開催

※実施した事業を月ごとに記入してください。

4 事業の効果・今後の展望

効 果	<p>古くより、生老病死のライフステージを見つめてきたお寺で、日常から逸脱した「非日常」ではなく、日常を見つめ直し、新たな社会を創り出すチカラを得るために、「異日常」の場に身を置くという創造的な環境を生むことで、自らの苦しみを共に見つめ、抱え込まないようにする、いわば「表現の学び舎」づくりに取り組みました。8月には広範な領域のアーティストと子どもたちが身体、音楽、絵画造形、言葉などの表現手段を使用した、数多くの体験学習のプログラムを行い200人を超える方たちにお越しいただきました。また、その場の運営に担った人々と共に企画を進め、自らの生き方とまちとの接点を探るためのトーク企画などを多角的に展開しました。その間にも、表現の「型」を探る各種の実践者に学ぶべく、commonsフェスタ期間中には、「子どもと表現」を考える演劇ワークショップの機会を設けたり、多世代が子どもの貧困という問題を「子ども」中心の目線で「フードバンク」の活動を通じたまちづくり（プログラム名「日常ユートピアの建立」）を考えるような取り組みを行いました。それにより、上町台地を中心とするまちのネットワーク</p>
-----	---

	団体とより深くつながることができました。
今後の展望	来年度は子どもとアートの接点の営み（キッズ・ミート・アート）を、連続的・継続的に行えるようなワークショップを検討しております。具体的には、演劇という表現ワークショップ、手芸や工作のワークショップ等、子どもたちと表現の取り組みをさらに深めていきたいと思っております。

5 事業の総参加人数

<p>400 名</p> <p>(内訳：地区内から参加約 350 名・地区外から参加 40 名・不明 10 名)</p> <hr/> <p>その他、年齢別など詳しく内訳がわかれば記入してください。</p> <p>(例：30代から40代が6割程度、など)</p> <p>30代から40代+子どもさん連れ 7割</p> <p>50代~60代 2割</p>

※「5 事業の総参加人数」は外部へは公表しません。

※「3 事業の時期と実施内容等」、「4 事業の効果・今後の展望」は、欄内に記入の上、これらを補足するようなパンフレット・チラシ・写真等があれば適宜添付してください。

平成 26 年 1 月 16 日

上町台地マイルドHOPEホーム事業 まちづくり提案事業 事業報告書

1 事業者名

谷町う木う木実行委員会

共同事業者名（あれば記入してください）

2 事業のテーマ・タイトル

谷町う木う木(うきうき)

※応募時につけたテーマ・タイトルを記入してください。

3 事業の時期と実施内容等

時 期	実 施 内 容 等
8月	
9月	
10月	う木う木ワークショップ vol.1 (10月19日)
11月	う木う木ワークショップ vol.2 (11月30日)
12月	う木う木モデル施工

※実施した事業を月ごとに記入してください。

4 事業の効果・今後の展望

効 果	今年度は、実際に、一般の市民の方々に、近辺（奈良・吉野）の材木を暮らしのなかでつかっていただくことに重きを置き、ワークショップやモニター施工を行い、実際に材木を購入されるかたも多く、一定の効果はあったと考えている。
今後の展望	日々の暮らしのなかで、わざわざ近郊の山の材木をあえて使うことは費用面や流通面のなかでは少ないが、そのハードルを乗り越え、少しでも山の現状（林業）や、身の回りに無垢の木材を置くことの良さや利点を、体感を通して感じてもらい、「身の回りに置きたくなる」木材の商品開発および発信（ワークショップなどを通じて）を続けていきたい。

5 事業の総参加人数

40 名

(内訳：地区内から参加 20名・地区外から参加 10名・不明 10名)

その他、年齢別など詳しく内訳がわかれば記入してください。

(例：30代から40代が6割程度、など)

10代 5名 20代 7名 30代 10名 40代 8名 50代 5名

60代 5名 程度

.....

※「5 事業の総参加人数」は外部へは公表しません。

※「3 事業の時期と実施内容等」、「4 事業の効果・今後の展望」は、欄内に記入の上、これらを補足するようなパンフレット・チラシ・写真等があれば適宜添付してください。